

2005 年度 医学・ライフサイエンスワークショップ

「日中における西洋医学と中医学」

— 特に「がん」「代替医療」について —

日時 2006 年 2 月 22 日 (水) 13:00~17:40

場所 東京大学医科学研究所 大講堂

主催 特定非営利活動法人日中産学官交流機構

後援 国立国際医療センター 国立がんセンター 東京大学医科学研究所

協賛 イーピーエス株式会社

統合医学としての漢方

慶應義塾大学医学部漢方医学講座
渡辺賢治

漢方医学は中国から伝来し、わが国独自の発展を遂げた伝統医学であるが、今や西洋医学の医師の7割以上が漢方薬を日常診療に使用している。明治維新後新政府は医師の資格を設けたが、西洋医学の教育のみを医学教育として認め、漢方医学は排除された。これに関して当時の漢方医師が反対運動を繰り広げたが認められなかった。

このような経緯からわが国では漢方医師の資格がなくなったため、漢方を勉強するためには西洋医学を修めてから、ということになった。しかし実際には西洋医学を修めてから漢方を勉強する医師はほとんどなく、一時衰退した。しかしその伝統は一部の医師により受け継がれ、さらに発展を加えた後に、1976年、大々的に医療用漢方製剤が認められ、多くの医師に門戸が開かれた。

このような状況はわが国の漢方を非常にユニークなものとしている。すなわち、他のアジア諸国では伝統医学の資格と西洋医学の資格が平行しているが、わが国においては一本化している。世界の潮流は代替医療から統合医療に推移しているが、わが国の医学はまさに世界に比類なき統合医学のモデルともいえる。

漢方医学を学ぶことは漢方薬を使用すること自体治療の幅を広げることも事実であるが、さらに重要なことは漢方医学の思想を知ることによって患者の見方が変わる、ということである。

西洋医学と漢方医学の相違は多々あげられるが、一つは西洋医学が細分化の方向に向かうのに対し、漢方医学は包括的・全人的であることである。また西洋医学では一度診断が下ると医療者も患者もそれにとらわれたものの見方をするが、漢方医学では同じ疾患であっても人によりその病態は異なると考え、また同じ人であってもその病期によっても病態が変わると考える点にある。これを例えていうならば西洋医学は静的、漢方医学は動的ともいえる。また、西洋医学は客観的指標を重んじるのに対し、漢方医学では主観を重んじる。

医療が多様化している現在、どちらの医学が優れているか、という議論はナンセンスと考える。西洋医学の目、漢方医学の目の両方を持つことで治療の幅が広がり、より良い医療が提供できるものと考ええる。